

【最優秀賞】

「想像することから一歩は始まる」

立命館慶祥中学校

3年 白間 あかね

私の住む町の一角には黄色い旗が風に揺れており、それほどことなくひっそりと、しかしそこに書かれた文字には力強い思いが感じられます。「返せ！北方領土」と書かれたこの旗に一体どれだけの人が目を止め、この文字に込められた思いを知ろうとする人が戦後七十五年の今、一体どれだけいるのでしょうか。

私の家族、親戚にはその地に住んでいた人はおらず、北方領土についての知識は学校の教科書から学んだ事だけで、私にとって遠い歴史の中の出来事でしかありませんでした。しかし去年、根室市で開催された「第五十次北方領土返還要求現地視察大会」に参加した時に、納沙布岬から望む青い海に囲まれた歯舞群島を目の当たりにして、「こんなにも近いのに何故自由に行くことが出来ないのか。」と、まだ戦争が終わっていない地域が日本には、この北海道にはあるという事を改めて知ったのです。

新型肺炎による自粛中に私は一冊の絵本と出会いました。その本は、夕焼けの綺麗な茜色の空が島をすっぽりと包み込んでいる様な美しい表紙で、ところどころ黄ばんでいるページをめくるとに歴史を感じさせる匂いがします。北方四島の一つである択捉島の北、<sup>しべとろ</sup>薬取。豊かな自然と温かい島民に囲まれながら楽しく過ごしていた思い出が色鮮やかな可愛らしい絵と共に描かれていて、私は読みながら何度も目を閉じてみます。走り回る子供達の笑顔、それを優しく見守る島民の穏やかな表情、島中に響き渡る大漁を知らせる漁船の汽笛。幸せそうな姿が次から次へと浮かんでいきます。そんな平和な日常が戦争によって奪われてしまうなんて、その時誰が想像していたのでしょうか。

現在、元島民だった方々の平均年齢は八十五歳となっており、実際にお会いしてお話を聞くことは難しくなっています。また、私達の様な若い世代では北方領土に関する問題を知らない、興味がないという声をよく耳にします。このままではこの問題が本当に遠い歴史の中の出来事になってしまうのではないかと、更には日本人の記憶の中から北方四島という存在すら消えていってしまうのではないかと私に危機感が募りました。そうなる前に一人でも多くの方が北方四島について関心を持つことが今、必要だと思えます。

毎年二月七日は北方領土の日。学生による返還署名活動が行われている事、ポスターや作文などで北方領土についての関心を広めようとしているイベントがあるという事が、メディアではあまり取り上げられる事はありません。コロナ禍の今、直接元島民の方にお話を聞く事は難しいかもしれませんが、私のように一冊の本に出会い豊かな四島を想像する事、そしてそこから関心が高まり北方領土についてもっと知りたいと思う事で、自分の生まれ育った故郷に帰りたいという、ただそれだけの真つぐな元島民の方々の思いは確実に受け継いでいく事が出来るのだと私は強く思います。

今日も黄色い旗がひっそりと風に揺れています。しっかりとその歴史を学び、その時代を懸命に生きてきた人々の思いをつないでいきたいと、私は小さく頷きその旗に誓うのです。